《書　評》

六四回顧録編集委員会編　ミネルヴァ書房

『証言 天安門事件を目撃した日本人たち――「一九八九年六月四日」に何が起きたのか』

（北海道大学）城山　英巳

評者は，1989年春から初夏にかけて北京の天安門広場を中心に起こった学生たちの民主化運動と，中国共産党による6月4日の武力弾圧「天安門事件」の当時，大学1年生であった。その後，通信社北京特派員として，さらに研究者として中国問題を追究する原点となったのは，この天安門事件である。

2019年は，天安門事件から30年の節目の年だった。当時，外務省記者クラブ詰めの外信部編集委員だった評者は，30年前に北京にいた日本人が何を見て，どう考え，行動したかについてやはり回顧したいと考え，計4回の企画記事を配信した。1回目は，日本大使館で情報収集に当たり，当時防衛駐在官の笠原直樹氏が残していた詳細なメモの内容，2回目は，邦人が被害を受けた外交官アパート乱射事件，3回目は天安門事件直後の日本外交の検証，4回目は，北京在住邦人3500人の救出作戦―である。

さらに2020年12月には，天安門事件に関する日本の外交文書全9冊も一般公開され，日本政府が中国を孤立させない外交方針を立て，中国だけでなく欧米にも働き掛けていた事実が明確になった。

こうした中で，2020年10月末に刊行された本書は，北京などで天安門事件に遭遇した44人の日本人が，30年前の日記やメモ，記憶を基に，実名で筆を執った記録として，非常に歴史的価値の高いものに出来上がっている。よく30年前の44人もの日本人に連絡が取れ，「記憶」を「記録」に変える作業を完遂できたものだと感心するばかりだが，六四回顧録編集委員会代表として記録を取りまとめた濱本良一氏（事件当時，読売新聞北京特派員）は，「当時，北京に駐在していた人の多くが第一線を退き，比較的自由にモノを言える時期を迎えていたことが最大の理由である」「三〇年という時間軸は，こうした回顧録を世に送り出すことができるぎりぎりのタイミングだったかもしれない」と書いている。

◇外交記録との差異

中国現代史の転換点となった流血の惨事を体験した44人の多くは，その後も「中国」に携わっている。そのため，民主化運動や天安門事件での経験を通じて，「中国にどう向き合うべきか」という視点が貫かれ，現在の「強国」の原点を考える上でも貴重な記録となっている。一方，邦人の生命や安全が脅かされた危機のなかで，日本政府の邦人保護あるいは対中認識・外交が果たして正しかったのかという問題を検証する上でも超一級の記録となっている。その観点からいくつかの証言を抜粋してみたい。

新たな事実が提示された手記として，当時全日本空輸（ANA）北京支店営業マネジャーだった尾坂雅康氏の記録「“奇跡のハンドリング”と呼ばれて」がある。武力弾圧を受けて軍同士の衝突の噂も流れ，北京在留の3000～4000人の邦人の間で帰国を求める声が高まり，当時の村田良平外務事務次官は，「私達にとっては，事態の評価よりも，在留邦人の安全確保が最優先の事項であった」と回想している（『村田良平回想録』下巻）。

全日空と日本航空（JAL）は定期便に加え，6月6～8日に日本への臨時便を運航することになり，尾坂氏は予約業務に追われるが，様々な壁にぶつかる。まずは発券が間に合わず，ワープロで「疑似航空券」を発券する。次に現金を持ち合わせていない人への対応。これには，帰国を最優先する立場から，名刺や紙にパスポート番号や運賃請求先などを記入してもらい，運賃未払いで搭乗させた。ワープロ打ちの臨時航空券で搭乗し

た客が990人，運賃後払いの搭乗客が208人だったという。

6月7日，日本大使館の手配したバスで邦人留学生が到着した。しかしANA臨時便は既に満席で，多数の外国人が搭乗していた。これに対して尾坂氏は「日本政府が要請した臨時便に外国人を搭乗させ，邦人留学生を乗せないのはどういうわけかと大使館から厳しい叱責を受けた」と回顧している。尾坂氏は「かなりのことを仕出かしてしまった。規則に忠実だったJALとはあまりに対照的だった。人間としての良心に従っただけだったが，組織人としては終わりだなと観念した」と振り返っている。

尾坂氏あるいはANAの人権感覚ある対応の結果，約1週間後の6月13日にANA臨時便で米国に帰国した乗客から感謝の声が届く結果になる。感謝の声や手紙はANAワシントン支店だけでなく，ワシントンの日本大使館にも届けられた。

しかし外国人を搭乗させたことに対して北京の日本大使館幹部はANAを「叱責」したわけだ。日本政府は危機的状況の中で，ルール違反と受け取られかねない疑似航空券や運賃未払いでの搭乗など柔軟なハンドリングや，日本人だけでなく外国人にも配慮したヒューマンな対応に救われたのではないだろうか。

しかしこうしたANAの対応について，2020年末に公開された外交文書を読むと，中島敏次郎大使発外相宛て電報「邦人保護（当館が行った邦人救援活動）」（1989年6月13日）の中で，「今回の邦人退避には日航及び全日空の協力が極めて大きく，両航空会社の協力なくしては今次作業は遂行しえなかった」として「極めて円滑に大量の邦人を無事帰国せしめることが可能になった」と評価しているが，ANAの活躍について詳細な記述はない。

例えば，同電報では「邦人（特に留学生）の中にはカード，現金を所持しないまま安全な地域に退避し，危険があるため学校等に取りに戻れない者が発生」したため，大使館は「日航，全日空と交渉して金銭の持ち合せのない者には借用書を入れることで航空券を入手出来るよう手配した」と報告されている。あくまで大使館が主導で対応したという書き方で，尾坂氏の記録との間には認識の違いがある。

◇民間人の記録

日本大使館員が，大学に取り残された邦人留学生を帰国させるために行った決死の「救出劇」は今も語り草となっている。同電報「邦人保護（当館が行った邦人救援活動）」でも，「日の丸を付けたバスに乗り込み，救出のために大学等の現地に赴く当館館員の送り出しには，丁度館員を戦場に送り出す気持であり，「是非無事に任務を完了して帰ってきてくれ」と思わず祈らずにはおられない気持で，胸があつくなるのを禁じ得なかった」，「バスによる救出プランの作成準備も含め連日館員は全員一体となって，不眠不休でこの作業に当った」と報告している。

しかし今回，本書に寄稿した福井一氏（当時，住友商事北京駐在員事務所駐在員）の記録「邦人救出に参加して」で，民間人である日本企業駐在員も「留学生救出」にかり出されていた事実が明らかになった。福井氏の手記によると，6月6日夜，上司から「福井君，明日の朝八時に日本国大使館に行き邦人救出に当たれ」との命を受け，「若干の戸惑いを感じつつ」，大使館に行くと，駐在員の多い商社に対して「邦人救出ボランティア」を募ったことを知った。住友商事からは福井氏，伊藤忠商事からは2人の計3人が大使館に協力することになった。「まだ北京市内は不穏な情勢でありますが，ご安心願います。ご覧の通りバスには大きな日章旗を車体四面に貼っており，万が一に備えて運転手も一台に二人ずつ配置してあります」との大使館側の説明に「何やら背筋に冷たい

ものを感じつつ」と記した。

7日に日本は大使館のある建国門外大街を通過しながら人民解放軍部隊が外交官アパートなどに向けて無差別乱射する事件が発生したが，それでも福井氏は同日午後も各大学を回り，留学生を救出した。しかも「唯一残念なこと」として「中国人学生の無念を晴らすまで帰国はしない」と，猛烈に帰国を拒んだ3人の邦人学生を残したことだと記し，最終的に78人の留学生を北京空港の救援機まで送り届けたという。しかし外交文書にはこうした民間人の活躍を記録しておらず，大使館員の奮闘を強調している。

本書では当時マツダ北京事務所長だった宮寺征人氏も「北京脱出記」を寄稿している（宮寺氏は本書刊行前の2020年5月死去，享年79)。「後で聞いた話だが，みな空港までの足の確保に苦労した。商社の駐在員が奮闘し，大勢の邦人を空港に導いたとのこと。大使館員は頼りにならなかった。結局，帰国するまでの間，日本大使館からは退去勧告だけで，具体的な役に立つ情報や支援は何一つなかった。外務官僚に命がけで自国民を守るという気概や使命感を望むのは空しいこと，と多くの人が感じているのではないか。政府外務省には，なにやら棄民体質のようなものがあると感じたのは私一人ではあるまい」と書いている。

宮寺氏は，天安門事件直後の『文藝春秋』1989年8月号に掲載された井出耕也「甦える悪夢 日本人が体験した「血の日曜日」」でも証言者として登場している。このルポルタージュには当時北京にいた複数の留学生が取材に応じており，6月5日に西独や英国などの大使館から車が来て，自分の国の留学生を乗せて引き上げていったが，日本大使館からは「学校内は外人が多いから安全だ。学内にいてください」と連絡が来たという話や，「大使館は臨時便が出ることを隠していたと話したら，〔企業派遣の邦人も〕実はそうなんだといっていた。みんなにそんなことを言ったら，パニックになって収拾がつかなくなってしまうということでした」という証言も紹介されている。

外務省は「邦人保護が不十分」という見方が出ていることに神経を尖らせ，「在中国大の邦人保護（反論用メモ)」(1989年6月12日）を作成していたことが，2020年末の外交文書公開で判明した。「留学生の一部の「大使館は冷淡」は已むを得ぬこととはいえ，切迫感ある状況下での不安に根ざした誤解もある（不安は，例えば，「軍が大学に来る（来た)」—事実でない)」など反論しているが，本書を読めば，現実に北京在留邦人がどう感じたか理解でき，日本政府の危機対応もより正確に把握できるだろう。

◇大使館はどう認識したか

民主化運動に対する日本大使館の認識も，当時警察庁から大使館に出向していた南隆氏の記録「デモ鎮圧の視点から見た天安門の激戦」で一端が浮かび上がった。「わが日本大使館上層部はこうした動きに対し，終始楽観的な見方が基調であった。五月上旬，大使館で月一回の全体会議が開催された際，中島敏次郎大使が，「各国の大使は，現在の動向をきわめて憂慮しているようだが……」というような趣旨の発言をしたのだが，チャイナスクールの某幹部は，「何の楽しみもない中国人にとっては夕涼みのようなものですよ」というようなコメントを発していたくらいだ」と回顧している。

さらに南氏は，軍による武力弾圧を北京飯店のベランダから観察し，6月4日朝，大使館に戻ると，某上級幹部から「昨晩はどうだった？大したことはなかったのではないの？」という質問を浴びせられ，「返す言葉もなかった」と振り返っている。「その彼は前夜マージャンに興じていたと別の館員から聞き及んだ」とも記している。

こうした証言からは，日本大使館の一部幹部が注力したのは，中国共産党・政府との関係であり，

民主化を求める学生や，それを応援する市民の動きに関心が薄かったのではないか，と感じざるを得ない。

中国に携わる日本人は，「チャイナリスク」と背中合わせであり，中国で度重なって起こる不測の事態に衝撃を受け，失望もさせられ，中国と付き合う難しさを痛感させられる。天安門事件後も，SARS流行（2003年）や大規模反日デモ（05年と12年），新型コロナウイルス流行（2020年）などが起きた。そうした時に何が起こり，日本人に何が降りかかってきたか，さらに日本政府はどう行動したか―。民間人の記録を残し，検証しておくことが求められる。

「天安門事件を通じて，私は真の緊急事態においては，行きつくところ国民は自己責任で自分の安全を守らなければならないということを冷厳な事実として学ぶことになった」。警察官僚として最前線にいた南氏の言葉は重いと言わざるを得ない。

（2020年10月，328ページ，3,200円＋税）

中国研究所図書館利用案内

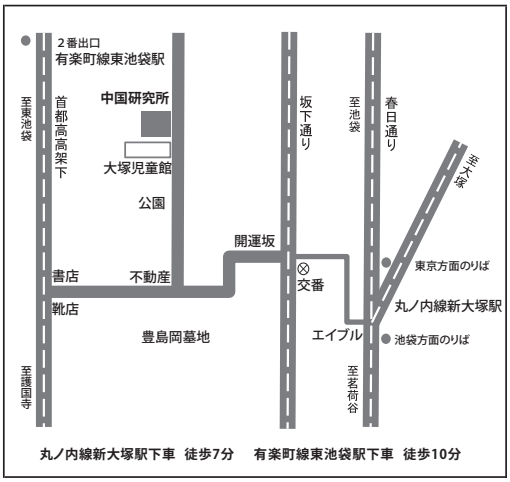
●所蔵資料：

所蔵数は約45,000冊。戦前から現在まで中国において発行された社会科学・人文科学系の図書，定期刊行物を所蔵しています。

●開館日時：月曜日（予約制）午前10時～正午，午後１時～５時

●利用料金：

	閲覧料	複写料
所員	無料	10円
研究会員	無料	20円
一般（団体）	1,000円	100円
一般（個人）	700円	30円
大学生・大学院生	300円	20円
留学生	無料	20円



●利用方法：

書庫は閉架式をとっています。館内備付けのカード目録またはCiNii Books（http://ci.nii.ac.jp/books/）にて請求記号をお調べください。係員が書庫より資料をお持ちします。なお，館外への貸出しは行っていません。

●資料郵送・FAXサービス：

所蔵する図書資料等の複写をご希望の場合は，郵送またはFAXで送付いたします。料金等詳しくはお問い合わせください。

●お問合せ先：

中国研究所図書館

TEL：03-3947-8029　FAX：03-3947-8039

E-mail：c-lib@tcn-catv.ne.jp　URL：https://www.institute-of-chinese-affairs.com/